

## 「キャリア教育の実践的指導内容の事例研究」 総合的な学習の時間の一活用例

山 岡 昭 吉

### 要旨

総合的な学習の時間で行う進路指導・キャリア教育の実践的指導内容について、高校3年間の進路指導実践の計画を概説するとともに、特にその中核となる進路学習を中心として実践的指導内容の事例を提示する。総合的な学習の時間の活用におけるキャリア教育を主眼としているが、指導計画における各活動の関連性や系統性を示すとともに、生徒一人一人の発達を組織的体系的に学年段階や学期別、進路希望先別を意識した、支援する仕組みを提示するために、進路学習以外の指導も含めて論述する。

### キーワード

キャリア教育、総合的な学習の時間、アクティブ・ラーニング、進路指導、適応指導、適合指導

### I はじめに

総合的な学習の時間で行う進路指導の実践を、キャリア教育の視点から整理し、高校3年間の、総合的な学習の時間の活用例として、実践的指導内容を提案することは、キャリア教育が急務となっている現在、学校現場で実際に活用できる具体的な参考事例となることもあり、意義があることと考える。

都立の商業高校で1年生から3年生までの3年間に、学級担任として行った進路指導の実践を整理し、実践的指導内容を具体的に提案したい。当該校は、商業高校のため、就職希望者が多いが、同様に公務員希望者も多く、また大学・短大や専門学校の進学希望者も多い高校であった。各方面のそれぞれの試験に

合格し、それぞれの希望の道に進んでいった生徒がほとんどであった。そのような良い結果を出すことができた大きな理由は、生徒目線でかなりきめ細かい丁寧な進路指導を行っていたことと、アクティブ・ラーニングの指導の方法が多く、生徒による自主的主体的な学習が多かったことがあげられる。その指導内容をキャリア教育の視点から整理し、学年段階や学期別、進路希望先別を意識した内容として具体的に提案したい。

## Ⅱ キャリア教育の視点からの進路指導実践内容の提案の意義

都立の商業高校の学校現場で学級担任として、企業への就職希望者、公務員希望者、大学・短大・専門学校への進学希望者などの生徒を対象に、実際に3年間の担任を4回計12年間、キャリア教育・進路指導を行った筆者が、総合的な学習の時間において活用できるものとして、指導内容を整理し、提案することは、キャリア教育が求められている学校教育現場にとって参考にできる具体的な事例を提示することになるため、有意義なことと考える。普通科教育の学校現場にとっては、特に参考になると思われる。<sup>(注1)</sup>

## Ⅲ 先行研究

高校3年間の進路指導を実際実践し、3年間を通じ、生徒に肉迫して指導した者自身が、キャリア教育の視点で実践的指導内容を整理し、総合的な学習の時間の活用例として、学年段階や学期別、進路希望先別を意識した指導内容を提案した先行研究は、ほとんどないに等しい状況である。このため、筆者のキャリア教育の視点からの進路指導実践内容をここに整理し、提案する意義もあると思われる。指導実践内容の一部でも参考にして活用・実践していただくために、実践した進路指導の内容を紙面の許す限り、詳しく述べていきたい。

## Ⅳ キャリア教育の視点からの実践的指導事例

「キャリア教育」が初めて登場したのは、平成11年12月の中央教育審議会答

申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」であった。この答申等を参考にしながら、従来の進路指導とキャリア教育との区別と連関を考察し、高校3年間の進路指導の実践内容をキャリア教育の視点から整理し、次に総合学習の時間の活用事例として提案したい。

## 1. キャリア教育の導入とその背景

「学校種間における接続と、学校教育と職業生活の円滑な接続を図るため、望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力態度を育てる教育（キャリア教育）を、小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある」と、平成11年12月の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」で提言している。

学校種間の接続をいかに改善するかが、この答申における基本テーマであった。それは、それぞれの学校段階での教育と学習が、次の段階とうまく繋がらないことであり、現実的にそれぞれの学校に多くの学業不振者、不適応者や中途退学者が存在していたことが見受けられている。

加えて、同答申は、学校教育の最終段階における接続、すなわち、「学校教育と職業生活との接続」の改善も視野に入れられていた。それは、若者のフリーター志向の広がりや無業者の増大、高水準で推移する就職後の早期離職等、「学校から職業への移行」にかかわる課題が深刻なものとなっており、学校教育における接続の改善を図るためには、卒業後の職業生活を視野に入れた接続全体の在り方を検討する必要があると考えられる。

キャリア教育の導入と推進は、「学校教育と職業生活との接続」の改善、換言すれば、「学校から職業への移行」にかかわる課題を克服するという観点から要請されたものであろう。

この中央教育審議会答申を受けて文部科学省は、「キャリア教育の推進に関する総合的調査協力者会議」（以下、「協力者会議」という）を設置した。2004年1月、「協力者会議」からの報告書『児童生徒の一人一人の勤労観・職業観を育て

るために』(以下、『協力者会議報告書』という)が提出され、キャリア教育の推進に関するきわめて具体的な提言がなされ、キャリア教育の導入、そしてその推進にとって大きな力となっている。ここでは主に、中央教育審議会答申と『協力者会議報告書』に依拠して、進路指導の実践内容を整理し、次に総合学習の時間の活用例として提案したい。

## 2. 進路指導とキャリア教育との区別と関連

『協力者会議報告書』では、進路指導とキャリア教育との区別と関連について、次のように述べている。

「進路指導の取組は、キャリア教育の中核をなすものである。これまでの進路指導においては、子どもたちの変容や能力・態度の育成に十分に結びついていなかったり、『進路決定の指導』や『出口指導』、生徒一人一人の適性と進路や職業・職種との適合を主眼とする指導が中心となりがちであった。

キャリア教育においては、キャリア発達を促す指導と進路決定のための指導とが系統的に展開され、将来、社会人・職業人として自立し、時代の変化に強くかつ柔軟に対応していけるよう、規範意識やコミュニケーション能力など幅広い能力の形成を支援することが必要である。」<sup>(注2)</sup>

また、これまでの進路指導の取組の課題と、キャリア教育が要請された視点についても、次のように述べている。

「これまで、進路指導の取組がその本来あるべき姿で十分展開されてきたとは言いがたいことも事実である。特に、一人一人の発達を組織的・体系的に支援するといった意識や姿勢、指導計画における各活動の関連性や系統性等が希薄であり、子どもたちの意識の変容や能力・態度の育成に十分結び付いていないといった状況は、あまり改善されていないのが実情であろう。キャリア教育は、このような進路指導の取組の現状を抜本的に改革していくために要請されたと言うこともできる。学校における活動全体がキャリア発達への支援という視点を明確に意識して展開される時、従来の進路指導に比べ、より広範な活動がキャリア教育の取組として展開できる。」<sup>(注3)</sup>

### 3. キャリア教育の方向性

進路指導とキャリア教育の相違点、すなわち、キャリア教育の方向性について、『協力者会議報告書』では次の2点を述べている。<sup>(注4)</sup>

(ア)「進路発達」と「進路決定」にかかる一連の指導の充実、(イ) 適応にかかる指導の一層の重視の2点である。この2点について、触れたい。

#### 3.1 (ア) 「進路発達」と「進路決定」にかかる一連の指導の充実

ここでは、キャリア教育では、キャリア発達を促す指導と進路決定のための指導を、一連の流れとして系統的に調和をとって展開することが求められている点が指摘されている。

集団を対象とした「進路発達の指導」については、相当幅広く実施されるようになってきているが、それを生徒の進路意識の向上や内面の発達に結び付ける指導については、まだまだ不十分であり、学級活動・ホームルーム活動における話し合い、グループや個人での調査研究、まとめ等の活動を充実し、積極的に展開していくことが求められることが述べられている。

一方、個人を対象とした「進路発達の指導」については、従来、進路希望調査の際に行われる面談などを除けば、実施されている例は極めて少ない。キャリア教育は、究極的には個のキャリア発達を目指すものであることを踏まえ、今後、この面での指導の充実が強く求められる、と指摘している。

#### 3.2 (イ) 適応にかかる指導の一層の重視

キャリア教育では、個人の適性と職業や進路先との適合とともに、将来、自立した社会人となるために不可欠な、社会や集団への適応にかかわる指導（以下、これを「適応指導」という）を行う必要性が強調されている。

個人の適性と職業・進路先との適合という視点に立った取組の重要性は、現在も変わることはない。しかし、産業・経済の構造的変化や雇用の多様化・流動化、さらには、子どもたちの生活や意識の変化等が進む現在、子どもたちが将来、社会人・職業人として自立し、時代の変化に対応していくための資質・能力を身につけるための指導、つまり適応にかかわる指導がなくてはならない。

を増している。

進路指導においても、適合とともに適応に関する指導は重視されるべきである。しかし、従来の進路指導の取組においては、個々の生徒の適性と職業や進路先との適合を主な目的とした指導（以下、これを「適合指導」という）が中心となり、適応に関する指導はそれほど重視されていない傾向が見られた。そのため、キャリア教育においては、「生きる力」の育成の視点を踏まえて、適応に関する指導をこれまで以上に重視していくことが求められている。

## V 進路指導の実践的段階的内容とキャリア教育

高校3年間のキャリア教育・進路指導の全体計画と実践的段階的内容について提案する前に、重要な視点として、キャリア発達段階と課題、「総合的な学習の時間」そして職業観・勤労観の形成に関する能力について、ここで述べておきたい。

### 1. 高等学校段階におけるキャリア発達段階とキャリア発達課題

『協力者会議報告書』では、次のように述べられている。

高等学校段階における職業的（進路）発達段階では、「現実的探索・試行と社会的移行準備の時期」と記されている。同じく、高等学校段階におけるキャリア発達段階とキャリア発達課題では、次の4点があげられている。<sup>(注5)</sup>

- ・自己理解の深化と自己受容
- ・選択基準としての職業観・勤労観の確立
- ・将来設計の立案と社会的移行の準備
- ・進路の現実吟味と試行的参加

### 2. 学習指導要領におけるキャリア教育関連事項と「総合的な学習の時間」

『協力者会議報告書』では、学習指導要領に示されているねらい、内容、配慮事項のうち、キャリア教育にかかわる主な事項が示されているが、そのうち、高等学校における「総合的な学習の時間」については、次の4点が記されている。<sup>(注6)</sup>

- 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の（在り方）生き方を考えること
- 生徒が興味・関心、進路等に応じて設定した課題について知識や技能の深化、総合化を図る学習
- 自己の在り方生き方や進路について考察する学習
- ボランティア活動などの社会体験、見学や調査、発表や討論、ものづくりや生産活動など体験的な学習

学級担任の立場でキャリア教育を行う機会を考えると、学年担任団における集団指導も含めて現実的に活用できる時間帯は、総合的な学習の時間、ロングホームルーム、ショートホームルームの時間を使用するのが一般的であろう。この3つの時間の活用においては、定期的にコンスタントに活用できるのが総合的な学習の時間であると経験的に考えられる。ロングホームルームやショートホームルームの時間は、短期的な時期的季節的な案件（スポーツ大会の選手選出、文化祭案件や諸行事の担当者選び等々）をテーマとして使わざるを得ないことが多い。当該時間全てではなくても、その一部でも、安定的に計画的に使いやすいのは、総合的な学習の時間、と考える。

進路指導の実践においては、上記の4点のうち、最後の1点については、十分な実践できなかったことが、今後の課題として残っている。本来は、ボランティア活動などの社会体験や生産活動などの具体的な体験的な学習を発表させることが目標であったが、時期・時間の設定などの諸般の事情で実践することができなかった。インターネットや書籍などで調査したものを発表させる程度の実践に留まってしまった。学校主導によるボランティア活動などの実践的な課題は、学年担任団の範囲を超えた、全校的な共通理解と協力を得なければ実施は難しいことである。全校的な取組にしない限り、他学年・全教科の年間スケジュール等に多大な影響を与えるからである。全学年・全教科・全分掌にかかわる教育課程の編成時に、全校的な共通理解を得る必要がある案件であるため、実施する年度が始まる前の早い段階で共通の全校的なコンセンサス作りに

着手すべきであったことが、反省点・課題としてあげられる。

### 3. キャリア発達課題と職業観・勤労観の形成に関する能力

キャリア教育の視点から、進路指導の実践を整理する場合に、重要となるのは、キャリア発達課題を達成するための必要条件として考えられる、職業観・勤労観の形成に関連する能力である。

この能力については、国立教育政策研究所生徒指導研究センターが「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」を研究開発し、職業観・勤労観の形成に関する能力を4つの能力領域に大別し、小学校（低・中・高学年）、中学校、高等学校のそれぞれの段階において身につけることが期待される能力・態度を具体的に述べている。<sup>(注7)</sup>

この4つの能力領域とは、人間関係形成能力、情報活用能力、将来設計能力および意思決定能力である。この4つの能力領域には、それぞれに2つの進路発達にかかわる諸能力が示されている。

人間関係形成能力には自他の理解能力とコミュニケーション能力、情報活用能力には情報収集・探索能力と職業理解能力、将来設計能力には役割把握・認識能力と計画実行能力、意思決定能力には選択能力と課題解決能力があることが言及されている。

次に、高校3年間のキャリア教育・進路指導の全体計画と実践内容の概要を示し、主な学習課題として、指導の中核となる「進路学習」について、職業観・勤労観の形成に関する4つの能力領域と活用した指導方法を記しておきたい。

## VI 高校3年間のキャリア教育・進路指導の全体計画と実践内容の概要

進路指導の取組の現状において、一人一人の発達を組織的・体系的に支援するといった意識や姿勢、指導計画における各活動の関連性や系統性等が希薄であり、子どもたちの意識の変容や能力・態度の育成に十分結び付いていない等が課題であることから、キャリア教育が要請されたことを、先述した『協力者会議報告書』で指摘されている。それらの点を考え、ここではキャリア教育・



進路指導の実践的指導内容の全体計画を、各活動の関連性や系統性が理解しやすいように、その骨組みである概要について先に触れておきたい。

## 1. 高校1年・・・主としてキャリア教育の適応指導になる。

### 1.1. 指導目標

- (1) 高校生活への適応と目的意識を育む。
- (2) 自主的・計画的な学習習慣を身につけさせる。
- (3) 自己理解を深め、進路選択にのぞむ態度を養う。
- (4) 進路の計画を立てる能力を養う。

### 1.2. 進路学習・・・主な学習課題

- (1) 高校生活への適応(意義、目的意識) <将来設計能力、KJ法(G\*)>
  - \* Gはグループワーク、Pは個人学習の意味である。
  - ・中学生生活は、どうだったのだろうか(中学生生活への振り返り)
  - ・高校生活に何を期待し、どう送っていくか
  - ・学習への取組
- (2) 自分について知ろう <人間関係形成能力、マインドマップ(P)>
  - ・自己理解の必要性とその方法
  - ・自分とは何だろう
- (3) 職業について調べてみよう <情報活用能力、ICT、KJ法(P)>
  - ・将来の夢・希望
  - ・働くこと
  - ・どんな職業があるだろうか
  - ・職業と資格
- (4) 進路の計画を立ててみよう <将来設計能力、意思決定能力、KJ法(P)>
  - ・進路希望実現へのプロセス
  - ・希望実現に当たっての問題点・課題

### 1.3. 個別指導・・・高校生活への適応、自分の将来の夢、希望的人生の達成に必要なこと、希望実現プロセス案、高校3年間の設計等について、

問いかける。

- ・ 1 学期 1 回目、2 学期 2 回目、3 学期は希望者のみ個人面談

#### 1.4. 進路相談・・・1 年生は、必要な時に適宜対応する。

- ・ 主な対象者は、相談希望者、要注意生徒（基本的生活習慣が不安定な生徒）

#### 1.5. 情報提供、学習促進

- (1) 学習・進路の手引き（小冊子）等の資料を配布、取り扱い方の説明
- (2) 進路説明会（生徒対象は 1 学期 1 回、2 学期 1 回の計 2 回、保護者対象は 2 学期に 1 回）
- (3) 学習の記録への取り組みと説明

#### 1.6. 実力テスト

- ・ 4 月、9 月、1 月の計 3 回、行う。

#### 1.7. 外部模試

- ・ 1 学期 1 回、2 学期 1 回の計 2 回

#### 1.8. 調査・検査・・・生徒対象

- ・ 1 学期に性格検査、2 学期に学習・進路調査、3 学期に進路希望調査。

## 2. 高校 2 年・・・主として適応指導だが、公務員希望者は具体的な適合指導になるが、3 学期は全ての進路希望者が、ほぼ適合指導になる。

### 2.1. 指導目標

- (1) 2 年生としての自分の役割を自覚させる。
- (2) 自己の適性を認識させ、職業について考えさせる。
- (3) 自己の適性を生かす進路計画を立てる能力を養う。

### 2.2. 進路学習

- (1) 2 年生になって <人間関係形成能力、将来設計能力、KJ法（G）>
  - ・ 学校生活の中での 2 年生の役割と自分の抱負
  - ・ 学習目標の設定と方法の吟味
- (2) 進路と適性 <人間関係形成能力、将来設計能力、マインドマップ（P）>

- ・希望進路と適性（進路適性検査の結果の検討）
  - ・希望進路実現のための条件と方策
- (3) 先輩の進路はどうだったのか <情報活用能力、KJ法（G）>
- ・上級学校、高卒者の職場
  - ・先輩からの聞き取り調査
  - ・どんな準備が必要か
- (4) 適性を生かす進路の計画を立ててみる <将来設計能力、マインドマップ（P）>
- ・自分の特性を生かす進路の計画
  - ・希望進路実現への学習計画を立てる
- (5) 3学期になって
- ・意識・意欲を高めるために
  - ・自己分析と企業・業界・社会研究
- 2.3. 個別指導・自分の将来・夢、希望的人生の達成に必要なこと、希望実現プロセス案、これまでの高校生活の振り返り、好きな仕事、得意な仕事、苦手な仕事、我慢できる仕事、続けられる仕事、進学した先の生活と希望、就職した先の生活と希望等について、主に問いかける。
- ・1学期1回目、2学期2回目、3学期は希望者のみ個人面談
- 2.4. 進路相談・2年生は、必要な時に適宜対応するが、進路別に行う場合が多くなる。
- ・主な対象者は、相談希望者、要注意生徒（基本的生活習慣が不安定な生徒）に加えて、高卒者の公務員希望者。公務員試験が難しいため、早めの適合指導が必要となるためである。
- 2.5. 情報提供、学習促進
- (1) 学習・進路の手引き（小冊子）等の資料を配布、取り扱い方の説明
- (2) 進路説明会（生徒対象は1学期1回、2学期1回の計2回、保護者対象も1学期1回、2学期に1回の計2回）
- (3) 学習の記録への取り組みと説明

## 2.6. 実力テスト

- ・4月、9月、1月の計3回、行う。

## 2.7. 外部模試

- ・1学期1回、3学期1回の計2回

## 2.8. 調査・検査・・・生徒対象

- ・1学期に性格検査（1年生のものとは異なる検査）と進路希望調査、2学期に学習・進路調査、3学期に進路希望調査。

## 3. 高校3年・・・主として適合指導であるが、3学期では、就職先決定者と進学先決定者を中心に適応指導になる。

### 3.1. 指導目標

- (1) 進路学習の成果を生かし進路を決定させる。
- (2) 希望進路実現への努力をさせる。
- (3) 進路情報の収集・整理・活用の方法を指導する。
- (4) 高校生活をまとめ、将来に対する心構えを養う。

### 3.2. 進路学習

- (1) 進路を決定しよう <将来設計能力、KJ法・マインドマップ (P)>
  - ・就職か進学か
  - ・希望進路実現への意欲と準備
- (2) 進路情報の収集と活用 <情報活用能力、マインドマップ (P)>
  - ・進路説明会への参加、情報の整理
  - ・進路の手引き・『進路ガイダンス』の活用
- (3) 進路先への準備、適合指導 <将来設計能力、マインドマップ (P)>
  - ・志望の決定
  - ・志望先に応じた具体的準備と心構え、段階的指導
  - ・就職・・・求人票の説明、校内選考、入社試験、内定後指導
  - ・進学・・・短大、大学、専門学校、推薦入学、一般受験、合格後指導
- (4) 卒業後の生活に備えて <将来設計能力、KJ法・マインドマップ>

- ・ 高校生活を振り返って
- ・ 卒業後の生活にはどのような心構えが必要か
- ・ 大学生活、社会人生活への準備と心構え
- ・ キャリアの積み上げに必要な最低限の知識の習得
- ・ 社会や経済の仕組みについての現実的理解の促進等
- ・ 雇用契約の法的意味、相談機関等に関する情報や知識等
- ・ 多様で幅広い他者との人間関係の構築の重要性と心構え

3.3. 個別指導・・自分の将来・夢、希望的人生の達成に必要なこと、希望実現プロセス案、これまでの高校生活の振り返り、好きな仕事、得意な仕事、苦手な仕事、我慢できる仕事、長く続けられる仕事、進学した先の生活と希望、就職した先の生活と希望等々を参考点として問いかけ、考えさせる。

- ・ 必要に応じて随時実施するが、就職希望者には、1学期はかなりの頻度で個別指導を行うようになる。

3.4. 進路相談・・3年生は、必要な時に適宜対応するが、進路別に行う場合がほとんどである。

- ・ 主な対象者は、1学期では就職希望者、高卒者の公務員希望者、大学進学希望者の順の場合が多く、2学期では、大学・短大進学希望者、であり、2学期の後半から専門学校希望者が増加する場合が多い。

3.5. 情報提供、学習促進

- (1) 学習・進路の手引き（3年生用の大部の『進路ガイダンス』）等の資料を配布、取り扱い方の説明
- (2) 進路説明会（生徒対象は1学期1回、2学期1回の計2回、保護者対象も1学期1回、2学期に1回の計2回）
- (3) 学習の記録への取り組みと説明

3.6. 実力テスト

- ・ 4月、9月の計2回、行う。

### 3.7. 外部模試

- 1学期1回、2学期1回の計2回

### 3.8. 調査・検査・生徒対象

- 1学期に進路希望調査、3学期に進路結果の整理。

## Ⅶ 「進路学習」を中心にした3年間のキャリア教育・進路指導実践内容

ここでは、先述した、キャリア教育・進路指導の全体計画のうちの、指導の中核となっている「進路学習」の学年段階や学期別、進路希望先別を意識した、具体的な実践の指導内容について、より詳しく述べていきたい。

### 1 1年生

#### 1.1 重点的留意事項

1年生の進路指導においては、基礎的かつ重要な内容である、キャリア教育としての適応指導を行う。

#### 1.2 1年生全般

1年生の総合的な学習の時間の授業では、後述するような、就職希望者・進学希望者等の進路先別の指導は行わない。進路先別の内容については、主として、進路説明会で行うとともに、希望者に対して、個別指導や進路相談の形態で行う。したがって、ここでは主として適合指導ではなく、適応指導を行うようにする。先述した進路学習の内容に対応させて、目指した諸能力について述べたい。

#### (1) 高校生活への適応（高校生活の意義、目的意識）

- 中学生生活は、どうだったのだろうか（中学生生活への振り返り）
- 高校生活に何を期待し、どう送っていくか
- 学習への取組

1年生の1学期の総合的な学習の時間において、これらの内容の指導を行った。KJ法などのグループワークは4・5月頃の前半に入れて行い、一人では振り返り難いことや気づきにくいことなどを思い出しやすくするとともに、人

間関係形成能力のうちの自他の理解能力とコミュニケーション能力を育成することを旨とした。グループワークの後には、生徒が各自でレポート用紙に箇条書き的にまとめるように指示した。

上記に3つの課題のうち、「高校生活に何を期待し、どう送っていくか」については、将来のことも考えて、じっくり考えるように時間を与えるようにした。グループワークにおいても、いろいろな意見を収集して進めるように指導した。ここにおいては、将来設計能力の計画実行能力育成と、情報活用能力のうちの情報収集・探索能力育成の基礎段階と位置付けて指導を行った。

## (2) 自分について知ろう

自己理解の必要性とその方法

自分とは何だろう

1学期の後半の6月頃の、総合的な学習の時間で、これらの課題の内容の指導を行った。ここでは、人間関係形成能力のうちの、自他の理解能力とコミュニケーション能力を育成することを意図して、グループワークと2者対話形式のワークを行った。ワークをする上で留意したことは、マイナス面が出ないように、プラス面、長所と思われる特徴・経験等に焦点を合わせて、語り合う方法で行わせた。自分が思っている自分と、他者が思っている自分との違いに気づかせるとともに、自分が気づいていない自分の長所を見つける方向で、ワーク後の整理をさせた。自分の長所を他者の手を借りてを見つけることは、今の生徒に必要なことであろう。ささやかながらも自分の良い点に気づかない限り、今の生徒は前に進みにくい傾向が見受けられるためである。

## (3) 職業について調べてみよう

- ・ 将来の夢・希望
- ・ 働くこと
- ・ どんな職業があるだろうか
- ・ 職業と資格

「働くこと」についての質問項目に家族の方が答えてくれた内容を、箇条書

きのにレポート用紙に整理してくることを、1学期末に夏休みの宿題として与えておく。質問項目とは、経験したこと、大変なこと、成長したこと、得たこと、働きがい、働くことの意味、いろいろな職業の種類等々である。

この宿題は、情報活用能力の情報収集・探索能力と職業理解能力、とともに将来設計能力のうちの役割把握・認識能力の育成の基礎段階として指導を行った。

2学期の総合的な学習の時間では、この宿題に基づいて、KJ法によるグループワークを行う。ここで配慮することは、宿題のレポート用紙を持参しないで、グループワークを行わせることである。家族のプライバシーの触れる可能性もあるため、プライバシーに踏み込まないこと、生徒各自の判断で話すこと、いろいろな意見を収集することに重点があることなどをワークの前に強調する。

「将来の夢・希望」については、段階的に考えるように指導した。一つは、夢・希望の実現性を3つの段階にランク付けすることである。実現可能性がかなり低い長期の努力目標としての夢、実現可能性があるがそれなりの期間の努力が必要な夢、実現可能性が高い夢の3つである。近年、定職につかない、好きな仕事を求めてニート・フリーターを続けている、夢追い人になってしまっている若者が多く見受けられる。実現可能性が低い夢を追っていたり、具体的な努力を重ねてきていないような若者がほとんどである。

夢自体を3つの段階にランク付けすることとともに、もう一つ、段階的に考えるように指導した。3つのそれぞれの夢をまた3つの段階に、達成目標として達成プロセスを考えさせることである。夢を実現させるには、具体的な努力が不可欠である。その努力目標を段階的に考えることの重要性に気づかせるとともに、その段階的な目標を設定するために、多く情報を収集する必要があり、その情報収集・探索能力を身につけさせることも意図している。

「どんな職業があるだろうか」、「職業と資格」の課題については、興味と関心がある職業を3～5つ、挙げさせ、インターネット等により調べさせる。次に、その仕事に興味を湧いた点、得たイメージをレポート用紙に書かせ、提出させる。その後、その職業の実態をインターネット等で調べさせる。その職



業の大変な点、良い点、得られる能力、働きがい、職場や仕事のイメージ、その職業に就くための段階的なプロセス、必要な資格等々についてレポート用紙に書かせ提出させる。ここでは、グループワークは行わない。生徒同士が相手のプライバシーに踏み込む可能性が高いからであり、今の生徒は、このようなことを知られるのは好まない傾向が強いからである。

#### (4) 進路の計画を立ててみよう

- ・進路希望実現へのプロセス
- ・希望実現に当たっての問題点・課題

興味と関心がある職業のうち、2～3つの職業に絞って、進路希望実現へのプロセスをそれぞれの職業ごとに2～3つ、考えさせ、それぞれのプロセス案をレポート用紙に、箇条書きか、またはフローチャートのように書いて提出させる課題を、2学期の総合的な学習の時間の最後の授業において、冬休みの宿題として指示する。

3学期になって、上記の冬休みの宿題を、進路の計画を立てる時に、たたき台の資料として活用するように指導する。ここでは、情報活用能力の情報収集・探索能力と職業理解能力の2つの能力の土台の上に立った、将来設計能力のうちの計画実行能力の育成を主に意図して進路指導を行うようにしている。意思決定能力のうちの選択能力や課題解決能力については、その能力の育成の意味と重要性を指導するが、生徒にそれら2つの能力を求めることはしない。1年生のこの段階では、この2つの意思決定能力の基礎に触れる程度に指導を行う。ここで生徒に、高い意思決定能力を求めてしまったら、これからじっくり育ていく芽を早い段階から奪い取ってしまうことになる。重要なことは、急ぐことではなく、ゆっくりじっくりといろいろと考えさせることである。

この内容は、一部の生徒にとっては、公表すると人間関係において、微妙な影響を起こせるために、原則として公表しない。内容が模範的でありかつ本人が公表を認める場合に限りにおいて公表を行う。

## 2 2年生

### 2.1 重点的留意事項

2年生の1・2学期では、基礎的かつ重要な内容である、キャリア教育として適応指導を行うが、3学期になれば、適応指導に移行していく。

### 2.2 2年生全般

主として適応指導だが、公務員希望者は早めの受験準備が必要なため、2年生の1学期には具体的な適応指導が始まることになる。3学期からは進学希望者も含めて、全ての進路希望者に対して、ほぼ適応指導に移行する。2年生の総合的な学習の時間の授業では、進路先別の進路指導は3学期からになる。1・2学期の公務員希望者対象などの進路先別の進路指導は、特別な講座として、通常授業時間外の放課後等で希望者に対して指導が行われる。<sup>(注8)</sup>

ここでは、先述した進路学習の内容に対応させて、目指した諸能力について述べていきたい。

#### (1) 2年生になって

- ・学校生活の中での2年生の役割と自分の抱負
- ・学習目標の設定と方法の吟味

2年生になると、スポーツ大会や文化祭などの学校行事やクラブ活動等において、中堅からリーダーへと役割が重くなってくる。ここでは、将来設計能力のうちの役割把握・認識能力が実践的に問われる。生活・仕事上の多様な役割や意義及びその関連等を理解し、自己の果たすべき役割等についての認識を深めていく能力を育てる必要があるため、その能力の育成を生徒本人に意識させることが重要である。そのため、1学期の前半において、「学校生活の中での2年生の役割」という課題で、KJ法でグループワークを行わせた。

「学習目標の設定と方法の吟味」については、各自の課題として、レポート用紙に箇条書きで書かせた。模範的なもので本人が公表を認めたものに限り、他の生徒の参考のために、一部の生徒に発表させた。

## (2) 進路と適性

- ・希望進路と適性（進路適性検査の結果の検討）
- ・希望進路実現のための条件と方策

1学期の後半において、進路適性検査の結果の検討を行いながら、希望進路と適性について考えさせるとともに、希望進路実現のための条件と方策について考えを深めさせる。特に、希望進路実現の条件については、情報活用能力のうちの情報収集・探索能力と職業理解能力が、1年生の時よりも、より深く求められる。ここで注意を要することは、経済的などの家庭の内部事情を全く無視して希望する進路を考えている場合があることである。3年生時の最終決定時期の親・生徒・教員との三者面談において、急に家庭内でのトラブルが発生する 경우가多々見受けられる。それを避けるためにも、より丁寧な情報収集・探索能力を生徒に求める必要があり、事前にその点を説明しなければならない。

進路においては、経済的に大きな負担が家庭にかかる場合がある。その点も含めて考え、状況においては、直線的な進路実現プロセスではなく、迂回的な進路実現プロセスを参考として提案することも重要になる場合がある。この場合には、意思決定能力の選択能力と課題解決能力が生徒に問われる。

ここでは、すぐに選択肢を決めるのではなく、幅広く情報を収集し、多くの選択肢の中から、柔軟に対応することを指導するべきであり、この柔軟な対応能力が後年の社会人生活において有意義なキャリア生活に資する場合があり、生徒の人間的成長が見受けられる場合も多い。このような具体的な適応指導も活用すべきであり、進路指導する教員に求められている。

## (3) 先輩の進路はどうだったのか

- ・上級学校、高卒者の職場
- ・先輩からの聞き取り調査
- ・どんな準備が必要か

1学期の後半から夏休みの宿題を経て、2学期に前半にかけて、これらの課題に取り組みさせる。個別のプライバシーに属するものではない、汎用的な情報に

については、2学期において、KJ法による各グループの発表の形で情報を伝達させ、各グループでどんな準備が必要か、についても考えを深めさせた。

情報活用能力のうちの情報収集・探索能力と職業理解能力をより一層、育成していくのに適していた課題であるので、ゆっくり時間をかけて調査を行うように指導した。

(4) 適性を生かす進路の計画を立ててみる

- ・自分の特性を生かす進路の計画
- ・希望進路実現への学習計画を立てる

2学期の後半から、自分の適性を考えながら、進路を考えさせ、希望進路実現への計画を立てさせることによって、将来設計能力の役割把握・認識能力と計画実行能力の育成を段階的に行った。

2.3 2年生3学期の、適応指導から適合指導への移行期の進路指導

ここではキャリア教育・進路指導を行うにおいて最も重要な時期、2年生の3学期の指導について述べたい。この時期の進路指導が生徒一人一人に対して、十分な効果があるものとして行われることが、高校生3年間のキャリア教育・進路指導の成果を左右すると考えるため、ここでは紙面の許す限り丁寧に述べたい。

進路を最終的に決定するべき3年生を目前に控えた、2年生の3学期において、適応指導から適合指導へとキャリア教育・進路指導を移行する場合に極めて重要なことは、生徒たちにより真剣に主体的に具体的に実践的に進路を考えさせることである。生徒自らが進路への意識・意欲を高めていくこと、意識の変容や能力・態度の育成が第一である。そのため、試行錯誤しながらも、可能な限りの実効性ある進路指導を行った。ニート・フリーターが生ずる場合には、この段階の進路指導を丁寧にやっていないことが大きな原因の一つではないかと思われる。それほど、効果があったことをここで強調しておきたい。

スポーツ大会・文化祭等の学校行事や部活動などで豊かな高校生活を送っている高校生にとって、3年生になって3～4ヶ月で、将来設計能力を具体的に

実践的に育成することは、極めて難しい。しかし、難しいと嘆いているうちには、日程的に3年生の夏休み前の6・7月頃には就職希望者には、就職先をある程度、決めておかなければならず、公務員受験者には、夏休み前、夏休み、6・7・8月頃にはそれぞれが希望する公務員試験を受けなければならない。

推薦入試希望の大学・短大希望者には、夏休みには進学希望先をある程度、決めておく必要が出てくる。

学校行事や部活動などで日々、高校生活を送っている生徒に対して、3年生の1学期から短期間で意識を切り替えて、しかも自主的主体的に自らの人生において重大な進路決定に取り組ませるには、時間的に不足している。より多くの時間が必要である。そのためには、2年生の3学期から、生徒が自主的主体的に取り組む、実践的な適合指導を行う必要がある。

ここで指導上、重要なことは、適合指導の期間が極めて短いことである。大学生は3～4年間かけて、進路先・就職先を決める。高校生は1年以内で、しかも実質的には数ヶ月で決めなければならない時間的制約がある。そのために高校生には、極めて短期間に集中して、真剣に取り組ませる必要がある。通常の授業で学んでいる教科書の世界、ある意味の他人事ではなく、自分のこととして、自主的に主体的に取り組ませることが求められる。

進路への意識・意欲を高めるために行ったことは、最初の段階は、形から入ることによって、指導内容の「見える化」を図ったことである。

#### (1) 意識・意欲を高めるために

2年生の3学期の前半の総合的な学習の時間では、履歴書の作成、面接指導、学力テスト、進路ガイダンスの指導等を行った。ここでは、生徒の意識・意欲を短期で急速に高めるとともに、人間関係形成能力の自他の理解能力とコミュニケーション能力の育成を目指した。

##### 1) 履歴書の作成

生徒自身が、この段階で自らを客観的に見つめるために、履歴書を作成させる指導を行った。「志望の動機」等の欄はこの段階では未記入にして書かせるが、

数字の書き方、字の書き方、空白の使い方、押印の仕方等々の形式には厳しく指導した。高校卒業してすぐに、経理部で小切手等を扱う者もいるため、特に、押印の仕方には、特に厳しく指導した。押印の仕方によって、銀行が正式な小切手と認めずに小切手による決済を拒否する可能性があるからである。

ここでは、「資格等」欄にどれだけの資格が記入できるのか、資格のレベルはどの程度か、「趣味・特技」欄ではその内容、「所属クラブ等」で部活動を続けているのか、部長等の役割を引き受けているのか、各欄が読み易く書かれているか等々について、この段階の自分を正確に確認させた。履歴書という書面に書くことによって、生徒自身の高校生活内容の「見える化」を行い、自分を見つめさせた。

他のものと異なり、履歴書については、2学期末に冬休みの宿題にし、冬休み中に書かせておく課題にした。それは、3学期から、実践的な進路指導・適合指導を行うことへの心構えを求めるためと、履歴書に記入することで、冷静に今の自分を見つめ、3学期にある、簿記・情報処理等の資格試験や学力テスト等の学業への準備をすることを求めるためである。

総合的な学習の時間では、その授業時間内（50分）に履歴書を作成から完成まで書けるようにすることを目標とすることを勧めたい。下書きのための線を引くことから始めるために、時間内に完成することは難しいが、時間内完成という目標を設定することによって、集中力も養成するようにしたい。入社試験などでは特に、その場で履歴書に相応する書類を書かせる場合があるので、それ相応に丁寧に書けるようにすることも目指したい。

## 2) 面接指導

この段階における面接指導は、意識・意欲を高めることが目的であるため、ここでは、内容よりも姿勢・動作などの形式に重点をおいた。「見える化」を意識した。生徒の真剣さを増させるために、生徒同士が相手の面接が見れるように、集団面接指導を行った。階段教室で、生徒6人を横一列に並ばせた。最初は、一列目の6人が指導対象になり、それを他の生徒が階段教室の座席に座っ

て、見学し、一列目が終われば、次の列の生徒が行う、という手順で指導した。この方法は、意識・意欲を高めるのにかなりの効果があった。普段、教師の意見を素直に聞かない生徒も、生徒仲間から見られ、後で笑われるのは避けたいために、真剣に指示に従って努力していた。

ノック、入室、入室後の礼、立ち方、歩き方、指・腕の位置、挨拶の仕方、丁寧な礼の仕方、座り方、座る時の姿勢、応える時の目線、応え方、退室の仕方等々と細かく指導した。高校入試やアルバイトの面接程度のものとは次元が違って厳しいものであることを伝えて、こちらの指導に対して真剣に対応することを求めた。面接指導は特に「見える化」の効果が出ていた。礼の仕方など、努力の結果が自他ともにはっきりわかるため、生徒の意識・意欲の向上が急速に向上した。

### 3) 学力テスト

高校生の進路指導においては、進学希望者も就職希望者も高校の学校推薦が必要になるため、各進路希望者共通の固定した一種類の学力テストで90点を得点しない限りは、学校推薦が得られないという条件をつけて、真剣に学力テストのための勉強をさせた。こちらに対しても、生徒は真剣に努力し、意識・意欲を高めるのに効果が認められた。この学力テストは、漢字の読み書きから、四文字熟語、国際機関の略語、古典作品と作者名、名言と人物等々の35問の設問の一般常識テストであり、過去の入社試験や大学入試試験などから選んだものである。この学力テストで90点に満たない場合は、90点以上になるまで何度も同じ設問内容の学力テストを受けられるようにしていた。

出題領域がかなり広いため、漢字が苦手なものなど、生徒の不得手分野がよくわかるとともに、何度受けても、生徒にとっての恥ずかしさを感じずには少ないように指導上の配慮をした。

### 4) 進路ガイダンスの指導

1・2年生の進路の手引きは高校で冊子に閉じた小冊子であるが、3年生の進路の手引きは、大学・短大・専門学校などの進学希望者から公務員希望者・

一般就職希望者などの、進路の適合指導のほとんどの内容を網羅し、その詳細を説明した内容で、170頁程度の大部のものであった。

いつも持参することを指示し、総合的な学習の時間では、進路先別の指導において、生徒各自の希望分野の箇所を参考にしながら、自学自習させる時に活用させる。<sup>(注9)</sup>

## (2) 自己分析と企業・業界・社会研究

### 1) 自己分析

上記の履歴書の作成や面接指導は、生徒が自分自身・自己への気づきを促すことも意図したものであり、引き続いて、次に自己分析の指導を行った。この自己分析の指導においては、人間関係形成能力のうちの自他の理解能力の育成を、コミュニケーション能力を育てることを媒介にして行うように心掛けた。生徒は2者対話式のワークを、複数回、複数相手に対して行うことを通して、自分が思っている自分と他者が感じている自分、自分が思っている興味と関心と他者が感じている特徴、長所・短所などを浮き彫りにし、気づかせていくように指導した。

### 2) 企業・業界・社会研究

自己分析を通して、どういう仕事、どういうもの・物に興味と関心があるのか、について、「興味と関心」を中核としたマインドマップを生徒各自に書かせた。(a) どういう仕事、どういうもの・物に興味と関心があるのか、について、考えさせた後に、実際に、どの仕事、物に興味と関心があるのか、を3つ程度に絞ってレポート用紙の上段に書かせ、それを軸にして、仕事、企業、業界へと関連性があるものを手繰っていくように視野を広げていき、そのプロセスをレポート用紙の下段に向かって書き下ろしていく方法を例示し、次に(b)各自でインターネット等で調べ、その内容に肉付けしていく指導を行った。情報活用能力のうちの職業理解能力を育成することを主たる目的としながら、情報収集・探索能力の育成も目指した。<sup>(注10)</sup>

(a)(b) の指導において、自己分析等の途中段階などで模範・参考となるも



のについては、生徒本人たちの了解の下で、生徒本人で発表させた。

次に、企業内組織と職務、仕事の種類と内容について、業界の概要が書かれた資料を基にして説明した。具体的にどのような仕事をするのか、どのような仕事上の大変さ・苦勞と働きがいがあるのか等々について、生徒各自がインターネット等で調べる課題を出した。ここで指導上留意したことは、いきなり好きな仕事を求めていくような、仕事の範囲を狭めないように指導することである。好きな仕事をしていると言っている方がいても、仕事に就いた当初は特に好きではなく、仕事を続けてきた結果として、好きな仕事になっている場合が多いこと。本人が好きな仕事といっても、まだ若く熟達度が低い者に対して、企業は給料をあげることはない、ということを考えさせることは、自立した社会人となるために不可欠な社会や集団へのキャリア教育の適応の指導の観点からも重要なことであろう。実際に、好きな仕事という狭い視野に縛られて、定職に就いていない夢追い人になっているニート・フリータを見受けることが多いからである。そのために、好き・嫌いという視点ではなく、続けていけるかどうかという視点を重視して仕事を考えるように指導した。

### 3) 働くということを多角的に考えさせる

働くということについて、自分のこととして主体的に考えを深めていく指導を行った。学生と社会人の違い、アルバイトと正社員との雇用保険などの処遇の違いなどを丁寧に説明し、生徒各自がインターネット等でこの違いについてグループワークを通して調べる指導を行った。報酬を得て生計を維持し一市民として社会に参画し社会を支える充実感、一定の社会的な役割を担った一人前の社会人として自立した生活を送る成熟感、チームプレーを通して働きながら職場の仲間と協働しながら、支えられ支えながら人間的に成長していくこと等々、働く社会人の視点の事例を示しながら説明した。

また、多角的に考えさせるために、1年生の夏休みの宿題で行った、家族の意見なども再び参考にして、いろいろな角度から考えるように指導した。

#### 4) コミュニケーション能力の重要性の強調

これまでの各種のグループワークや面接指導を通して、コミュニケーション能力の重要性を感じてきている生徒に対して、主に個人プレーを通して学業を行う学生とチームプレーを通して仕事をする社会人との違いについて説明を行った。チームプレーを通して日々、仕事を行う社会人にとって、自己と他者や社会との適切な関係を形成・維持するのに不可欠な能力であり、時代の変化に対応していくためにも必要な能力であること等、コミュニケーション能力の重要性を強調した。時代の変化に対応できる自立した社会人の育成を目指す、キャリア教育として重要な適応指導の観点からも、再度強調しても強調しすぎることはないであろう。またここでは、コミュニケーション能力の前提となる明朗さについて、身につけていくようにも指導した。

上記の「3) 働くということを多角的に考えさせる」と「4) コミュニケーション能力の重要性の強調」については、適宜繰り返して指導を行った。『協力者会議報告書』で指摘している、「将来、社会人・職業人として自立し、時代の変化に強かつ柔軟に対応していけるよう、規範意識やコミュニケーション能力など幅広い能力の形成を支援すること」<sup>(注2)</sup> という、キャリア教育への要請に深くかかわるためである。

### 3 3年生

#### 3.1 重点的留意事項

3年生の総合的な学習の時間の授業では、1学期中頃までと3学期以降は、3年生全般を対象とした指導を丁寧に行う必要がある。1学期中頃から2学期までは、主として進路先別の適合指導になるが、主として、進路説明会やアンケートを行うとともに、希望者に限定せず学級全員に対して、個別面談ならびに保護者を含めた3者面談を行い、丁寧な進路相談を行う必要がある。したがって1・2学期では主として適合指導を行うが、学級生徒一人一人に対して、その意識の変容に配慮しながら、慎重に進路指導を進めていくことになる。1学期中頃からの2学期までの進路先別の適合指導については、「進路学習」の「(3)

進路先への準備、適合指導」のところで、詳しく触れたい。

3学期以降になると、就職希望者や進学希望者の内定・合格者を中心に3年生全般とした適応指導を進めていくことになる

### 3.2 3年生全般

次に、先述した進路学習の内容に対応させて、目指した諸能力と指導内容について述べていきたい。

#### (1) 進路を決定しよう。

- ・就職か進学か
- ・希望進路実現への意欲と準備

1学期の中頃までに、就職か進学か、進学では大学か短大か専門学校か等の進路先を最終的な決定をさせる必要がある。特に就職か進学かは、早めに決める必要がある。就職希望者は7月頃には就職希望先企業を選択・決定し、次に高校内の校内選考で学級代表から学校・学年代表として選ばれ、入社試験を受ける資格を得る必要がある。<sup>(注11)</sup>

夏休み中には内々定として決まる場合もあるため、この時期は、総合的な学習の時間の授業ばかりではなく、放課後においても、生徒への丁寧な個別指導と進路相談が欠かせない。この場合に注意すべきことは、守秘義務である。生徒によっては、進路先を他人に知られることを極度に恐れる者がいる。未だ進路先を最終決定していない段階でも最終決定している段階でも、守秘義務は守るべきであり、公にする場合には事前に生徒に伝えるべきであることは言うまでも無い。生徒との信頼関係が崩れた場合、キャリア教育を含む進路指導そのものが成立しなくなる。この点を理解していない教員を見受ける場合があるので、特に指摘しておきたい。

ここで生徒には、将来設計能力と意思決定能力が求められるが、就職か進学か、についての進路選択決定では、生徒個人の意思決定以前に、家族内の話し合いが重要となる。特に、日頃どれだけの数と質の会話がなされているか、によって、極めて大事なこの時期で家族内のトラブルが生じる場合がある。<sup>(注12)</sup>

(2) 進路情報の収集と活用

- ・進路説明会への参加、情報の整理
- ・進路の手引き・『進路ガイダンス』の活用

ここでは情報活用能力と将来設計能力が生徒に求められるが、重要なことは、進路説明会の内容とともに、進路の手引き・『進路ガイダンス』の内容の充実度である。それは、『進路ガイダンス』を中心にして、キャリア教育・進路指導を授業内外で行うとともに、生徒一人一人が自主的に情報収集・活用をするために作成されているからである。<sup>(注9)</sup>

(3) 進路先への準備、適合指導

- ・志望の決定
- ・志望先に応じた具体的準備と心構え、段階的指導
- ・就職・・・求人票の説明、校内選考、入社試験、内定後指導
- ・進学・・・短大、大学、専門学校、推薦入学、一般受験、合格後指導

次に進路希望先別に進路指導・適合指導について述べたい。

A 就職希望者・・・一般的な企業就職希望者

これまでのキャリア教育・進路学習の上に、個人面談や3者面談を通して、自己分析から得られた自己の方向性、職業、職種、業界、企業等々について、絞っていく。この場合、参考となるのは、机上の事務的な仕事を続けていけるのか、職場が活発なところで接客等の人間的交流が多いところを望むのか、などであった。学業成績が良くて、大人しくて、コミュニケーション能力が低い生徒は、教員にとっては良い生徒である場合が多いが、就職活動においては苦勞した場合が多かった。何故なら、そのような生徒に適合しやすい職種である、事務的な仕事のほとんどは、企業内においてはパソコンなどの情報機器で処理できるため、求人職種としては激減しており、情報機器では処理しにくい人間関係に関わる仕事を担当する職種が求人される場合が多くなっているのが現状だからである。そのために、コミュニケーション能力が高い、明るい元気な生徒が望まれている。そのようなコミュニケーション能力が低い生徒には公務員

を早い段階で目指させるか、公務員の職場に準ずる非営利団体を志望先に考えるように、早めに参考事例として選択肢に入れるように指導した。選択するのは本人に任せることは当然のことであるが、このような具体的な就職活動情報を伝えることは、大学生のキャリア教育・進路指導においても必要なことである、と考えている。<sup>(注13)</sup>

求人票の説明が極めて重要であり、生徒が納得いくまで丁寧に詳細に、具体的事例を示しながら説明した。求人票で特に重要視し、説明をしたのは、事業内容、職種・作業内容、賃金の内容、福利厚生等（各種の保険の意味等）、就業条件等々である。

入社試験の時に提出する履歴書と面接対策で、特に重視したのは、志望の動機、と高校生活のことである。高校生に対しては、誠実さと協調性が求められる場合が多いので、その点を配慮して指導した。<sup>(注14)</sup>

## B 公務員希望者

2年生から、特別講座で公務員試験受験のための適合指導をされているため、総合的な学習の時間では、勉強の進み具合を確認することと、不安になる時期なので、励ますことが重要になる。秋の最終試験で万が一、不合格になっても、公務員試験不合格者を希望している企業もあることと、公務員試験の勉強が企業の入社試験にも活きることを伝えて、試験勉強に集中できるように配慮した。公務員試験に合格し、採用された先輩の例を挙げて、合格後の明るい安定した生活について、丁寧に説明し、公務員試験に前向きに頑張れるように心を配った。

## C 進学希望者

### C1. 大学進学希望者

大学進学希望者は、推薦入試希望者と一般入試受験希望者とに分かれるが、推薦入試希望者には、大学入学後の大学生生活と大学卒業後の社会人生活のことを真剣にいろいろな側面から調べ、考えるように指導した。一般入試受験希望者には、将来の生活を考えることに加えて、受験科目の勉強の進み具合を確

認し、励ますことを留意した。1学期の段階では、一般入試受験希望者には、焦って答えを解くことよりも、しっかり理解納得してから先に進めることと不安なところは繰り返し勉強することを勧めた。一般入試受験希望者にとっては基礎固めの時期と考えるからである。

2学期になると、就職希望者のほとんどが内々定を取り、浮かれてくるため、一般入試受験希望者のみならず、推薦入試希望者も、落ち着かなくなってくる。このため、この時期になると、大学進学希望者の気持ちを落ち着かせ、勉強に集中させるように、焦点を絞って学習成果を測定し記録し、少しずつ成長していくことを意識して勉強するように、指導することが重要になってくる。

### C 2. 短大進学希望者

大学進学希望者とほぼ同様の指導を行った。特に注意したのは、大学と異なり、2年間なので、入学して1年生の時から、卒業後の準備をしなければならない点を強調し、短大卒業後のことを含めた志望の心構えを確認した。

### C 3. 専門学校進学希望者

専門学校進学希望者には、一部の入学難関な専門学校を除いてはほぼ入学しやすいため、自分の進路希望に合い、進路実現可能性が高い、しっかりとした専門学校を選ぶことを指導した。実技実習が重要になる国家資格系の専門学校においては、きちんと実技実習が行え、施設や指導も充実していて、卒業後の就職に対しても、進路指導専門の専任職員がいる学校を考えることを指導した。専門学校によっては、実技実習の教室や道具が不足している学校もあり、進路指導専門の専任職員がいない学校もあるで、その点も注意して、派手な学校案内で誤解しないように指導した。

#### (4) 卒業後の生活に備えて

- ・ 高校生活を振り返って
- ・ 卒業後の生活にはどのような心構えが必要か
- ・ 大学生活、社会人生活への準備と心構え
- ・ キャリアの積み上げに必要な最低限の知識の習得

- ・社会や経済の仕組みについての現実的理解の促進等
- ・雇用契約の法的意味、相談機関等に関する情報や知識等
- ・多様で幅広い他者との人間関係の構築の重要性と心構え

3学期になると、就職希望者も進学希望者も進路先が決定している生徒が多くなるため、総合的な学習の時間の授業では、進路先別への配慮が要らなくなり、3年生全般に対して適応指導を行うことができるようになる。

進路先が決定している安心感からか、授業に身が入らない生徒が多くなるが、この時期の適応指導の内容は、高校卒業後、変化する社会に対応できる自立した社会人になるために必要な重要な内容であることを強調し、社会人になった場合などを想定して、真剣に指導を受けることを求める。指導する側も生徒同様に、進路先決定者が多くなる安心感からか気が緩みがちになるが、生徒の将来の人生にとって極めて重要な適応指導であるため、気を抜かずに指導すべきである。

当初は、高校生活を振り返らせて、これまでの高校生活に対する心の整理をさせる。特に、努力したこと、もっと努力しておけば良かったことなどの点を具体的にレポート用紙に列挙させるなどして、見える形で整理させる。

卒業後の生活にはどのような心構えが必要か、卒業後の生活を想定して、レポート用紙に2～3つの想定できるケースを書かせる。社会人になる場合は、勤務先の場所と1週間の生活、進学する場合は進学先の学校の場所と在学期間の想定できる生活等々を列挙させ、次にその場所でどうしたいか、どうなりたいか等々と希望を列挙する。そしてそうなるのに必要なことなどを列挙していく。この時に注意すべきことは、書くことは文章ではなく、キーワードでもいいことである。なぜなら、この段階では、イメージを膨らませ、いろいろとたくさん、あらゆる方面から思い浮かべることが重要だからである。

次の「大学生生活、社会人生活への準備と心構え」の段階では、書く内容がイメージから具体的な生活内容に踏み込んでいくように指導する。ここでは、希望的側面ばかりではなく、必要な準備事項を丁寧にたくさん列挙し、次にそれらの

優先順位をつけさせるのである。あくまで、仮想のことであることを強調するとともに、仮想であるから、より一層、多角的にいろいろな側面から想定することを勧めると、生徒はより前向きに卒業後のことを具体的に考えるようになる。注意を要することは、生徒のプライバシーに属するものであるため、生徒が書いた内容についての守秘義務は守るべきであることである。

「キャリアの積み上げに必要な最低限の知識の習得」については、かなり重要であるため、総合的な学習の時間の授業時間のみならず、他の時間において、専門家（ハローワークの職員等）を呼んで、説明会で説明をしていただくことを勧めたい。

当然のことながら、「社会や経済の仕組みについての現実的理解の促進等」「雇用契約の法的意味、相談機関等に関する情報や知識等」「多様で幅広い他者との人間関係の構築の重要性と心構え」などの内容に触れる話をしていただき、その後の総合的な学習の時間でさらに、事例を示しながら、理解を深めるように指導を行う必要がある。

## VIII おわりに

総合的な学習の時間で行う進路指導・キャリア教育の実践的指導内容について、高校3年間の進路指導実践の計画を概説するとともに、特にその中核となる進路学習を中心に実践的指導内容の事例を提示した。総合的な学習の時間の活用におけるキャリア教育を主眼としているが、指導計画における各活動の関連性や系統性を示すとともに、生徒一人一人の発達を組織的体系的に学年段階や学期別、進路希望先別を配慮した、支援する仕組みを提示するために、進路学習以外の指導も含めて論述した。生徒一人一人に対応したキャリア教育・進路指導が求められている学校教育現場の指導の参考になれば幸いである。今後も引き続き、生徒たちの意識の変容や能力・態度の育成に結び付いたキャリア教育・進路指導などの、キャリア教育の実践的指導の課題について取り組んでいきたい。



## 注記：

(注1) 筆者自身は私立の普通科教育の進学校出身のため、進学指導に特化した進路指導を受けた記憶はあるが、残念ながら、面接指導も含めた従来型の進路指導のみならず、キャリア教育の一端も受けた記憶が無い。その理由として考えられることは、指導する教員自身が、進学指導に特化した進路指導しか経験していないことに加えて、大学生活においても、教職課程を学ぶ時においても、具体的なキャリア教育のみならず、体系的な進路指導内容を学ぶ機会が無かったことがあげられる。筆者自身も同様であった。3校の商業高校に勤務し、高校3年間のキャリア教育・進路指導を4回経験し、1年生時の入学から3年生時の卒業まで学級担任を継続して受け持ち、生徒指導ならびにキャリア教育・進路指導も継続して3年間、合計12年間にわたって担当した。商業高校の、結果責任を負うがごとの丁寧な体系的なキャリア教育・進路指導には、すべてが生徒本人の自己責任的な放任主義的な進学指導しか知らなかった私にとっては、当初はとまどったが、経験年数を経るうちに、その緻密な指導体系を理解できるようになり、それなりに習得することができた。現在までの、商業科教育が培った組織的体系的なキャリア教育・進路指導が、進学指導のみに特化していることが多い普通科教育は、吸収できることが多いのではないかと考えている。本稿は、そのことに資することも目的の一つになっている。

(注2) 「キャリア教育の推進に関する総合的調査協力者会議『報告書 児童生徒の一人一人の勤労観・職業観を育てるために』平成16年1月28日、14頁

(注3) 同上、15頁

(注4) 同上、15～16頁

(注5) 同上、9頁

(注6) 同上、13頁

(注7) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター『児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について 調査研究報告書』2002年 47～48頁

(注8) 大学生においては、公務員対策の実際の受験準備に入るのが、受験専門学校の平均的なスタート時期では大学2年生の後期である場合が多いが、高校生においては、2年生の1学期から、である。何故なら、近年、高校卒業資格要件の公務員試験に短大生が、高卒資格で受験するケースが多く、現役高校生にとってはかなりのハンデになっており、現役合格者も減少している。このため、早めに受験準備などの適合指導をはじめておく必要がある。

(注9) 学校現場のキャリア教育・進路指導において、かなり教育効果が期待できる、キャ

リア教育・進路指導の指導教材・「進路ガイダンス」については、紙面の都合上、別稿にて詳述する予定である。

(注10) この (a)(b) の指導の概要については、拙稿「キャリア教育の理論と実践事例」(千葉経済論叢 第57号 2017年12月52～55頁)において詳述した。

(注11) 就職希望者が多い商業高校等の職業高校は、就職希望先が生徒間で集中して重なる場合があり、就職希望先の企業は就職希望高校生の複数名同時受検を好まない傾向があるため、学内選考が必要になる場合がほとんどである。

(注12) 生徒本人が大学進学希望だが、保護者は経済的理由で就職を希望している場合、逆に生徒本人が専門学校進学希望だが、保護者は大学進学希望の場合等々、いろいろなケースがある。どちらにしても、3者面談で進路先決定の適合指導をする場合には、指導する側が、意見の相違から意見の一致に向かうように、進学や就職に対する相応の知識が必要であるとともに、生徒本人と保護者の言外の意図を正確につかみとれるようなコミュニケーション能力が必要となる。

(注13) この点の指導は、極めて重要なことであると考えている。結果的に選択するのは生徒・学生本人であるのは必須の要件であるが、生徒・学生の意識の変容や能力・態度の育成の先に、進路先への適切な情報収集と多様な生徒・学生の意思決定に資する、企業情報を含む情報提供は適切に行うべきであると考え。近年のニート・フリーターの増加は、ここにも原因の一つがあるように思われる。

(注14) 就職を希望する生徒の場合は、就学意欲が少ない生徒以外では、家庭生活上の経済的理由で就職を希望する場合が多い。この場合には、高校卒業と同時にいずれかの企業を選択し就職せざるを得ない事情がある。進路先への意思決定が何年も先の問題である進学希望者とは大きく異なるのは、この点である。激動する社会や企業社会で生きる力、生き抜く力を育てるために、生徒目線で有効性がある、迂回的な進学指導も含めた、多様なキャリア教育が求められていることを痛感する次第である。

## 参考文献

- ・文部省『中学校・高等学校進路指導の手引ー進路指導主事編』1977年
- ・文部省『中学校・高等学校進路指導の手引ー進路相談編』1982年
- ・文部省『中学校・高等学校進路指導の手引ー中学校学級担任編』1982年
- ・文部省『中学校・高等学校進路指導の手引ー個別指導編』1986年
- ・文部省『中学校・高等学校進路指導の手引ー高等学校ホームルーム担任編』1990年
- ・佐久間勝彦『アクティブ・ラーニングへーアクティブ・ティーチングから』一葦書房 2016年
- ・仙崎武・野々村新（編著）『最新進路指導概論』福村出版 1979年
- ・仙崎武・野々村新（編著）『学校進路指導ー理論と実践』福村出版 1984年
- ・吉田辰雄（編著）『最近の生徒指導と進路指導ーその理論と実践』図書文化 1992年
- ・武田圭太『生涯キャリア発達ー職業生涯の転機と移行の連鎖』日本労働研究機構 1993年
- ・中西信男『ライフ・キャリアの心理学ー自己実現と成人期』ナカニシヤ出版 1995年
- ・野々村新他（編著）『入門進路指導・相談』福村出版 2000年
- ・吉田辰雄（編集代表）『21世紀の進路指導事典』ブレーン出版 2001年
- ・国立教育政策研究所生徒指導研究センター『児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について 調査研究報告書』国立教育政策研究所 2002年
- ・キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議『報告書 児童生徒一人一人の勤労観・職業観を育てるために』文部科学省 2004年
- ・吉田辰雄（編著）『最新生徒指導・進路指導論』図書文化 2006年
- ・野々村新他（編著）『生徒指導・教育相談・進路指導』田研出版 2006年
- ・吉田辰雄・篠翰『進路指導・キャリア教育の理論と実践』日本文化科学社 2007年
- ・山岡昭吉「キャリア教育の理論と実践事例ー総合的な学習の時間のー指導事例」『千葉経済論叢』第57号 35～58頁 2017年

（やまおか しょうきち 本学教授）